



▲▲▲  
モスクワ入りの夜の火花  
▼▼▼  
去る九月三日の夜、私はモスクワにいた。日本大使官邸での拍撃のち、十年前とまったく変わらぬ粗末な設備の「科学アカデミー・ホテル」に戻って、九日間のモスクワ滞在の忙しいスケジュールもこれで終ったと思つたのだが、その夜のモスクワは、どことなく華やいた雰囲気であつた。

▲▲▲  
一連のゴルバチョフ人事  
▼▼▼  
その前日、ソ連科学アカデミーのアメリカ・カナダ研究所で懇談したときには、こ

が同席していたにもよるが、党中央委員でもある同所長は、対米政策にかんして依然としてクレムリンのブレーン役をつとめている人物であつた。この小さな火花も、最近の米中ソ関係を反映するものとして注目されるべきであらう。

確認させられども、いまや中ソ関係のみならず、モスクワ・平壤・北京のあいだにも、さびに将来的にはハノイのあいだにも「ゆるやかな同盟関係」が形成されつつあるのだと思ふ。

中国内政の変化に伴って、中国側对中ソ関係が根本的に変わり、ソ連を敵視する戦略が大きく転じていることが、このように「ゆるやかな同盟関係」を可能にしてつづいていっている。

戦略的次元で見ると、アメリカのSDIの開発、朝鮮半島の将来構想、ソ連SS20の極東配備、将来のシベリア開発、そして日本のGNI-257問題や、いわゆる「日本軍国主義」批判に、これら

火花があがっている。一体、今夜は何だろうと想われる、それは日本がミズーリ号艦上で降伏文書に署名した日から四十年目のお祝ひの日であつた。

この大きな光景に接して、もとより私は心中複雑な感慨にとらわれたが、翌朝のマス通信は、ちょうどその夜に、ソ連共産党のアリエフ政治局員が在ソ中国大使館に招かれ、一時間以上も歓談したと報じていた。

しかもその属書は、「政治局員兼第一副首相」なのであつて、今日のクレムリンで中ソ関係や中朝関係に大きな影響力をもつアリエフ氏がソ連共産党首脳属書で、中国側と互に抗日戦勝四十周年を祝つて、たとひ新事業には注目せざるを得ないであらう。

同じ九月三日の午後、私があつた旧知のチフウィンスキー外交学院長は、ソ連の中国学界を代表して唯一人アカデミー正会員であるばかりか、かつては中ソ国境会議の顧問もつとめ、現在はソ中友好協会副主席として中ソ関係の改善に重要な役割を果

# ゴルバチョフ体制と中ソ関係

## “ゆるやかな同盟”に変容へ

東京外大教授 中嶋 嶺雄



れも旧知のルーキン極東政治課長が、この十月に、同研究所のアルバート所長とともに中国の国務院研究所の招待で初めて訪中するのを、いかにも楽しみに語つていた。

ゴルバチョフ書記長の過般の『タイム』誌とのインタビューにもアルバート所長

▲▲▲  
モスクワ・平壤・北京  
▼▼▼  
今回の訪ソによって私の得た印象は、もとより従来からの私の中ソ和解を改めて

いかにゴルバチョフ個人がスマートで若くても、ソ連という体制は動かせるものではない、とタカをくくっているとするならば、その代価は日本外交にとつても、きわめて大きいものになりはしないであらう。

所は、よりアカデミックな立場を持しているといえようが、世界経済・国際関係研究所のヤコブレフ前所長が今回の一連のゴルバチョフ人事で党中央宣伝部長に任命されたことに示されるように、ソ連におけるアカデミーは、この国の政策形成にも大きな影響を与えている。

極東研究所長には、この夏に弱冠五十二歳のチタレンコ氏が就任したが、これもゴルバチョフ人事の一環であつて、同所長は就任後、初めての日本人学者としての私との会見で、「中国が主張している(中ソ関係改善のための)三大障害は、鄧小平が日本やアメリカに与えた贈り物」と語つていた。

ロシアに社会主義諸国が同一立場に立つつたことを、私は今回改めて確認せざるを得なかった。

ゴルバチョフ体制発足以来半年の足取りを直視し、また、ソ連社会の硬直したシステムを知らなければ、ソ連はいま大きな変容期にさしかかっているように思われる。今日、ソ連では、非ブレンネフ化が明らかに進捗しつつあり、それだけにアンドロポフ時代への評価は変わつて高い。そしてゴルバチョフ体制の根本的な利点は、リーダーシップが大きく若返つていっていることであり、彼らには十分な時間があることであらう。